第 10 回教育哲学会奨励賞　選考結果および授賞理由

選考結果

第 10 回の教育哲学会奨励賞は、『教育哲学研究』第 126 号、127 号に掲載された論文を対象として理事会において選考を行い、奨励賞にふさわしい論文として、櫛桁（横井）祐哉会員の「「抵抗」概念から見るカント教育学 ― 「訓育」論を超えた「抵抗」論 ―」（『教育哲学研究』第 126 号所収）を受賞作として選定した。

授賞理由

櫛桁（横井）論文は、イマヌエル・カントが『教育学』のなかでしばしば言及する「抵抗」概念に着目して彼の教育思想をあらためて解釈し、それを通して具体的な他者に開かれた多元主義的な立場からカントにおける「抵抗の教育」と「啓蒙の教育」との連関を解明することを目的としている。本論文はまず、先行研究を丁寧に辿り直すなかで、カントの『教育学』が、自然（野性）状態から ― 単なる主体ではなく、多様な他者と生きる人間としての ― 市民状態への移行を論じた段階的発達論と、他者による教育と自律のパラドックスを論じた近代教育批判という二つの論点から主に研究されてきたことを確認する。その上で、後者の先行研究群のなかに近年、カントの啓蒙論における具体的な他者の立場を考慮する多元主義的な側面に光を当てて上記の近代教育批判を問い直す考察が見られることを指摘する。著者もまた多元主義的な側面を重視するという立場に立ち、カントのテキストに忠実かつ精緻に即しながら、外部から到来する「抵抗」との出会いこそ、動物的・感性的衝動を克服する「訓育」を可能にするのみならず、知識伝達にかかわる「開化」、文化・芸術・社会秩序にかかわる「文明化」、「道徳化」を生起・促進させる契機となること、また他者の自由と権利を尊重し「法的強制」に自ら従属する自立した市民状態への移行も可能になることを明らかにしている。

カントの『教育学』という教育学の古典に真正面から挑んだ点は高く評価できる。また、先行研究において等閑視されてきた「抵抗」概念に着目してカントを読み直すという着眼点も独創的で興味深い。主体単独の自律を説いたと捉えられがちなカント解釈の陥穽を抜け出し、具体的な他者の立場から主体が自らの欲求や傾向性を反省するというカントの多元主義的な解釈の地平を救い出そうという点でも、意欲的な試みであるといえる。

他方で、本論文は「抵抗」概念への着目によるカント読解の新規さという点に議論が集約されており、その理論的展開や歴史的・思想的文脈の裾野がやや狭いきらいがある。また、市民的抵抗との連関に関する考察が先送りされてしまっており、そのために「抵抗」がなぜ道徳的な主体化に至るのかという肝心の問いに十分にこたえられておらず、それができていれば、よりいっそう奥行きの深い充実した論文になったのではないかという残念な思いも残る。加えて、テキストの精緻な解釈に基づきつつ、それをこえて、従来の教育哲学研究のあり様や今日の教育状況に挑戦しようとする姿勢をいかに明示するかが、著者の今後の課題だといえるだろう。

とはいえ、本論文に示されている丁寧な先行研究への目配りとその整理、精緻なテキスト読解、明快な論証と明晰な叙述といった堅実な学術的手法は、他の領域における（教育学）研究とは異なる、教育哲学研究の基本であり、独自性である。本論文は教育哲学研究のそうした水準を十分に満たしており、奨励賞に値すると評価された。

以上をもって、理事会では櫛桁（横井）祐哉会員の「「抵抗」概念から見るカント教育学 ― 「訓育」論を超えた「抵抗」論 ―」を第 10 回教育哲学会奨励賞にふさわしい論文として選定した。